

[編集後記]

医学医療の分野に限らず、日本の社会基盤が大きく変わろうとしています。学術誌の形態も、インターネットを介したものと変貌しつつあります。出版そのものが、インターネットに飲み込まれようとしている昨今です。そこで、広報の手技はともかく、本誌の存在基盤を考えるにあたり、参考となる点を記しておきましょう。

私事にわたりますが、千葉医学雑誌を手にとると想い出すことが一つあります。今から30数年前のことです。筆者が大学院博士課程修了間際の出来事です。当時、学位授与申請に必要な原著論文は、単独著者であることが必須でした。非現実的であることは百も承知の上での制度です。この矛盾こそが本誌の存在意義でもあったのです。即ち、既に発表済みの英文原著論文（筆者が筆頭の共著論文）で未公表としていたボツのデータを急遽あしらえて、和文論文による本誌への掲載という1ヶ月間くらいでの作業による離れ業です。現在、もはや、そのような学位申請システムはなくなり、筆頭著者であることは要求されておりますが、英文による共著論文でよいとなっております。

しかし、それにしても、学位授与に関わる助け舟としての役割以外に、本誌の存在意義を追求したいものです。科学史上多大な貢献をするであろう研究成果が掲載される学術誌へと発展させたいものです。では、どうするかです。ここに、一つのヒントがあります。Vero細胞をご存知でしょ

うか。千葉大学医学部在職中の安村美博先生により樹立された培養細胞で、世界で広く汎用されているものです。日本臨床, 1963; 21: 1201で最初に報告されているようです。清水文七. Vero, 動物細胞培養マニュアル, 共立出版, 1993; 299-300で紹介され, Simizu B, Terasima T. Vero Cells - Origin, Properties and Biomedical Applications, 1988: 234. 千葉大学医学部微生物学教室出版としての出版物はありますが、細胞樹立あるいは保存にまつわる記録が本誌にあっても良かったと思うのですが。万事、この種の永久保存に相当する業績を積極的に汲み上げる努力が必要のようです。必ずしも、諸種の学術誌における掲載要件に適合しなくとも、記録しておくべき業績はないかです。

医学医療に係わり教育や経営面などを含めての創造的業績は、山とあるのではないのでしょうか。既知事項の右から左への移動作業ではない未知の既知化、常識的事項の美辞麗句化ではない非常識の常識化、知識の知ではない叡智の智を求めたいものです。本誌が、流行におもねることなく、地道に創造的精神を伝え継ぎ、そのような科学の真髄を追及する千葉医学人を育成する媒体となるように発展することを願うばかりです。10年先、50年先、否、100年以上先に開花するであろう業績の記録を、我こそはとご投稿下さることを願ってやみません。

(編集委員 鈴木信夫)